

## 1 自己評価及び外部評価結果

### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4290101973		
法人名	医療法人平田クリニック		
事業所名	上野町グループホーム		
所在地	長崎県長崎市上野町1番5号 平田メディカルビル3階・4階		
自己評価作成日	令和7年9月20日	評価結果市町村受理日	令和7年11月7日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.jp/42/">http://www.kaigokensaku.jp/42/</a>
----------	---

### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 福祉総合評価機構		
所在地	長崎県長崎市宝町5番5号HACビル内		
訪問調査日	令和 7 年 10 月 1 日		

### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

まだ新しいビルで開放的な空間を生かし、季節に応じた行事を考え、春はひな祭りや花見、夏は生の竹を使ったソーメン流し、秋は敬老会、冬はクリスマス会などを通じて入居者様も一緒に準備等に参加できるよう工夫している。また、内部及び外部研修を開催し、スタッフの介護技能の向上を図っている。また、グループホームでの看取りも行っている。気になる事や心配なことがあれば入居者様とご家族と一緒に話し合いを進めて安心して過ごせるよう気掛けている。  
医療連携も他病院、訪問歯科とできている。

### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホームは、“人間としての尊厳・家庭的な雰囲気・個性を生かす”という理念を掲げ、入居者が地域の中で安心してその人らしく穏やかに暮らせるよう、支援に努めている。ホーム開設前、法人代表と管理者は、認知症グループホームへの理解を深めてもらうために地域住民に説明会を繰り返し開催し、地域との交流のきっかけが生まれている。ホームは近隣の幼稚園や小学校と交流を続け、浦上天主堂の神父の訪問や奉仕活動を積極的に受け入れている。入居者の趣味や習慣の継続支援や特技を活かしたフラワーアレンジメント活動などを通して、楽しみや生きがいにつながる機会を提供している。一人ひとりの声に耳を傾け、すぐに支援に反映する姿勢を大切に、職員は笑顔を引き出すような関わりを心がけている。日々の暮らしの中で、入居者の“その人らしさ”に関わる情報を継続的に把握共有し、尊厳を守り、大切にされていると感じられる支援に努めるホームである。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎月の勉強会やミーティングの時に繰り返し理念の確認や意味を話すようにしている。	理念には“人間としての尊厳・家庭的な雰囲気・個性を生かす”を掲げている。代表である院長は、現場職員の思いを照合し、理念に基づくケアの実践に取り組むため、全体会議において共有している。管理者は、入居者の情報を把握し、職員に内容を明確に伝達し、入居者本位の支援を実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	今は運営推進会議の時しか接点がない為、今後消防訓練や祭りなどへの参加を考える。	ホーム開設前、法人代表と管理者は、認知症グループホームへの理解を深めてもらうため、地域住民に向けて説明会を繰り返し開催し、現在では地域住民が相談を寄せる存在となってきている。また、ホームは近隣の幼稚園や小学校と交流を続けたり、浦上天主堂の神父の訪問を受け入れる等、地域との繋がりを築いている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ感染が続いている状況でなかなか地域への参加が難しい。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	御家族の参加を頂き、日ごろ感じていることを話してもらう時間を取り、改善につながるようにしている。	入所者家族・自治会役員・行政担当者の出席にて、年6回の運営推進会議を開いている。議事録には、会議での活発な質疑応答の経緯を記しており、会議内容をケアサービスに反映していることが確認できる。ただし、出席していない家族への報告は行っていない。	より良いケアを目指して充実した話し合いを重ねている運営推進会議の内容を全家族に伝えるための手立てを講じることに期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	包括支援センターや福祉総務課と連絡を取り合いながら理解を深めるよう更なる協力体制が取れるようにしている。	ホームは、地域包括支援センターや市担当課職員と連絡を取り、地域情報や利用の問い合わせに対応している。今年度は介護相談員の受け入れを行っている。行政の案内を受け、高齢者権利擁護などの研修や地域の取組に参加し、行政との協力体制を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束の適正化に向けて委員会組織での勉強会を行い、スタッフへ共有しながらケアの向上を図る。	ホームは身体拘束適正化のための指針を整備し、委員会を設置している。また、年2回、職員に対して研修を実施している。ホームでは身体拘束にあたる行為を行っておらず、職員全員が入居者への声かけや具体的なケアの方法について話し合う場を定期的に設けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	委員会組織による虐待防止の研修を行い、スタッフへ共有できるようにしている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	それぞれの制度について詳しく勉強会を開くことができず、いまだ制度への理解や話し合いなどできていない。ただ、外部研修で代用している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所前に面会を行い、入所時に改めて重要事項を説明しながら理解を深めるようにしており、質問とに対し丁寧な説明を行うようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議への参加や面会時にご家族からの意見を聞き、職員や管理者と共有し、反映できるようにしている。	契約時、苦情相談の対応や手順の説明を行っている。家族の訪問や電話、ホーム便りを通じて入居者の様子を伝え、家族の意見を汲み取っている。家族や入居者の声は、職員間で共有し、フロアミーティングで支援内容や手順の改善に努めている。これまでに、ごみの回収方法や食事プレート等に関する意見を、運営に反映している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のフロア会議で職員の意見を聞き、全体会議の中で代表者や管理者と話し合いを設けている。	管理者は、フロアミーティングや日常から職員の意向や提案を汲んでいる。全体会議では、院長や事務員も交えて職員の意見を聞き取り、運営に反映している。職員の声から冷蔵庫の使い分けや浴室のコールボタンの位置変更、物品購入に活かしている。職員の希望に沿ったシフト調整も行っており、働きやすい環境づくりに取り組んでいる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	必要な研修に参加できるよう情報を集め、職員が参加できる状況を作るよう努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	本人による自己評価を元に面談を行い、スキルアップにつながるような話し合いを設ける。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同じ医療法人ではあるが別のグループホームのスタッフとの交流を行い、お互いの活動について話す機会を設けている。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の既往歴を把握し、どういった症状の訴えがあるのか、どんな不安があるのかを話し掛けながら把握できるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所前と入所時の面談で今までの家族のかかわりや不安に思っていることを聞き取っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	毎日の観察と面会時に家族が感じていることを聞き取りながら、対応をスタッフで話し合う機会を設ける。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人が今何を訴えたいのかを聞き取れるよう、寄り添っていこうと努力している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	少しでも本人に関わることがあればその事柄を共有し、生活しやすい環境を整えるようにする。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会は事前予約制を取っているが、当日であっても面会できるよう配慮する。	入居時の面談では、本人や家族から馴染みの人間関係、趣味、生活習慣などの情報を丁寧に聞き取り、フェイスシートを作成している。管理者は情報を共有しやすい形で整理し、職員は支援に活かしている。家族や知人との交流、神父の訪問など、関係が途切れないよう支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入所者同士の相性や話しやすさ、関係性を確認しながら、トラブルがないよう支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	御家族の気持ちを組み、退所後も支援ができるよう声掛けに努める。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	訴えに対し”何を””どうして欲しいのか”を聞き、言葉で言えそうにない人は表情や動きで把握できるようにする。	職員は、日常の関わりの中で、入居者が思いや意向を表しやすい関係を築いている。会話が困難な場合は、筆談や表情から汲み取り、本人本位の支援に努めている。得た情報は記録し、支援に活かしている。会話から聞き取った食べたいものをおやつに取り入れるなど、本人の希望に沿った支援に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前の面談で大体の生活歴や好きなものなどを聞き、スタッフ間で共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の観察で身体状況や感情をくみ取り必要な介助ができているかをスタッフ間で話し合っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアマネが作成した看護計画に沿って本人に必要な介護をスタッフ間で話し合い、今できることを確認している。	利用開始時、本人・家族との面談を実施し、暫定の介護計画を経て、本計画を策定している。計画作成担当者は、職員の意見を踏まえてモニタリング、評価を行い、家族や入居者の意見を反映した上で同意を得ている。ただし、職員は介護目標に沿った支援を行っているものの、実践状況と記録の確認と反映が十分に行われていない。	入居者一人ひとりの目標に合わせた介護計画に基づいた介護計画の実践を確認するための手立ての工夫に期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人の介護記録だけではなく業務日誌や連絡帳等を利用し、必ずスタッフが目を通して介護業務を実践できるようにする。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	他部署（別フロアやディケア等）とも関係を持ち、ホーム内だけではなく季節の行事を考え、実践する。また、フラワーアレンジメントの開催やマルシェへ参加し買い物を楽しんでいる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	まだ、自治会の行事に参加するまでの関係ができていないので、今後の課題である。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	定期的な訪問診療に加え、Dr.が必要とした検査の説明を行い、家族の協力を求めている。	法人母体であるクリニック院長による診療に加え、看護師長が入居者の健康管理を担っている。従来のかかりつけ医への受診も可能なように配慮し、通院が必要な場合は、家族の協力のもと支援している。夜勤専従者も看護職であり、医療的にも安心できる体制を整えている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	施設管理者やケアマネ、クリニックの看護師等へ状態を報告し、Dr.の指示と看護を受けよう観察と報告を行う。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	主にケアマネが連絡を取りながら、必要に応じて退院前のカンファレンスに参加する。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人状態に応じてDr.看護師長や施設管理者とご家族と面会を行い、今後について説明と意思確認を行う。そこで話されたことはスタッフ間で共有できるように記録しておく。	看取り重度化に関する指針を整備し、契約時に本人・家族に説明し、同意を得ている。入居に伴うリスクの説明、看取りについての事前確認等、終末期に向けた対応が確認できる。職員への勉強会、エンゼルケアに向けての準備、緊急時の対応等の周知を図っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	AEDの操作方法、心肺蘇生法などの救急研修、救急車を呼ぶときに必要なことをスタッフが理解できるようなフローチャートを作成し、見やすい所に置いておく。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。 また、火災等を未然に防ぐための対策をしている。	火災訓練はビル全体で行うものと夜間を想定したグループホーム独自の訓練を年2回行い、水害や地震時はビル内避難を実践し、安全を確保する。	ホームは、机上訓練を含む災害対策訓練を毎月実施し、日中帯・夜間帯を想定した訓練やクリニックビル全体での総合訓練も行っている。職員は、避難経路やマニュアルの整備、防煙窓、防火扉、避難確認サインの設置など、具体的な対応策を進めている。ただし、消防署立会い訓練はこれからである。	消防署立会いの訓練を実施し、指導や助言を受けながら災害対策を確認していくことが望まれる。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	それぞれの訴えに耳を傾け、個室での生活で不便が無い様に見守りながら声掛けを行っている。	職員は、入居者の目線に立った声掛けや尊厳を大切にしたり関わりに努めている。できないことは、さりげなく寄添い、トイレ介助など羞恥心への配慮を徹底している。ホームは、個人情報や鍵付きの棚で管理し、写真使用についても事前に本人・家族の同意を得ている。また、職員に守秘義務の徹底を図っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人がしたい事、言いたいことを最後まで聞き、自身で動いてもらう時の見守りを行う。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	スタッフの動きの中でどうしても優先順位をスタッフにしてしまうところがあるので、それを改善するよう話し合いを行いながら本人優先な介護を目指す。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴時の着替え、毎日の洗面で本人ができる場所を見守り、必要時は介助できるようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	飲み込みや葉の状態に必要な形状を確認し、食べやすい食事を目指す。ただ、準備や片付けへの支援はできていない。	ホームは、主菜を外部業者に依頼し、主食は各ユニットで出来立てを提供している。体調等に応じて、おかゆ対応やアレルギー対策も行っている。行事や誕生会は特別な献立にて、職員が調理提供している。公園に弁当を持って行き食事を楽しんだり、竹で流しそうめんを行うなど、食を通して生活を楽しめるよう配慮している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎日の食事と水分の摂取量記録しており、脱水や摂りすぎにならない様気を付けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアを歯ブラシ、スポンジ、舌ブラシを使いながら行う。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	歩行できない人も車椅子で適宜声掛けと誘導を行い、トイレでの排泄を継続できるよう配慮している。	居室にトイレを完備し、入居者は自室を使用している。職員は、排泄状況を表に記し、個別カンファレンスで個々の状況を把握している。パッドのサイズを検討し、入居者が夜間安心できるようポータブルトイレを使用することもある。入居者のできることを見守り、トイレでの排泄を支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄確認表で毎日の排泄を記録し、便秘や下痢の状態をDr.へ報告し、対応を行う。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	スタッフの都合ではなく本人の意思を確認し、シャワー浴や湯船に入るなど選択してもらい、気持ちいい入浴になるよう工夫している。	週2回を目安に、入浴支援を行っている。入浴は、午前午後と準備しており、入居者の気持ちを優先して支援している。手すりや補助具、ストレッチャーなど準備し、本人が安心して入浴できるよう準備している。また、季節の湯や入浴剤を用い、ゆっくり入浴時間を取り、好きな音楽を掛けるなど、リラックスできるよう工夫している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	排泄の状態や寝る時間がそれぞれ違うので就寝準備を手伝いながら、眠れるように支援を行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方時は薬情書を必ず目を通し、何をいつ飲むことになっているかを確認しており、変更があればその都度個人カルテに記入して、確実に服用できるように共有している。また、薬局と連携し服薬管理指導を受けている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	誕生日会、ひな祭り、敬老会など行事食としていつもと違うメニューをスタッフ、厨房職員と一緒に考え、好き嫌いも把握して提供できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	御家族が同行する条件でしか外出許可は出ていないので、できるだけ家族の希望を聞き、実現できるように支援している。	ホームでは、稲佐山展望台へのドライブや天主公園へのピクニックに弁当を持参し、季節を感じる外出に取り組み始めている。個別の買い物や外食は、家族の協力を得ている。また、移動販売車で購入や敷地から外の様子を眺めるなど、日常的に外部との繋がりを感ぜられる機会を設けている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	定期的に行われるディケアでのマルシェに参加し、買い物を楽しむ機会を設けている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	必要に応じてご家族への電話に出て貰い話ができるように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	エアコンの風向きによって不快に感じることもあるのでテーブルの位置の変更や座る場所を変えるなどの工夫を行う。	オープンキッチン横に職員の作業スペースを設けることで、職員は常に入居者の様子を確認することができ、安心安全な支援に繋がっている。広いリビングルームには大きなテーブルを配し、入居者が集まって会話を楽しむコミュニケーションの場となっている。職員が清掃を行い、清潔で居心地よく過ごせるよう努めている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	その人の性格や言動からトラブルにならないような席の組み合わせを考え、退屈しないような時間を作るようにする。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人が自宅で使っていたタンスや布団など持ち込みも可能にしており、“それがあるところが自分の部屋”と認識できる空間を作るよう努力している。	ホームは各居室にトイレと洗面台を備え、職員が毎日清掃して清潔を保っている。動線に沿って職員が要所に手すりを設置しており、入居者は使い慣れた筆筒やテレビ等の家具を自由に持ち込んでいる。家族写真、スキンケア用品、編み物用具やお気に入りの服などを配し、自分らしい空間となるよう整えている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	部屋のドアに自身の名前がわかるような表示をしたり、持ち物への名前の記入で本人も見えてわかるようにしている。		